

## 青海チベット地区に於ける八斎戒の授戒儀礼

小野田 俊蔵

2017年8月25日の夜明け前の5時頃、伝統的な仏教用語では「晨朝じんじょう(チベット語ではトラン tho rangs)」と呼ばれる時間に私は青海チベットの同仁(レブコン)にある僧院「ロンウォゴンパ(Rung bo dgon chen)」の僧坊を訪ね、同僧院のゲシェ(博士)であるゲンドウン・チュータル(dGe 'dun Chos dar)師から同寺に伝わる伝統的な八斎戒の授戒をした。この在家用の戒律は、期間を限定して出家僧に近い別解脱の斎戒を守り、特定の祈願の為に功德を積んでそれを回向するための儀礼である。初期經典の『スッタニパータ』にこの修行の功德についての記述があるので古くインド仏教から続いている儀礼であることが分かる<sup>(1)</sup>。パーリ語文献の中には10年間繰り返しこの八斎戒を修行し続けた在家信者の話題を見つける事が出来るという<sup>(2)</sup>。青海チベットではこの授戒のことをドンルン(sdom lung)と呼び、一連の斎戒儀礼をニユンネー(bsnyen gnas)と呼ぶ。この斎戒を守っている期間のことも彼らはドムバ(sdom pa)と呼び「ドムバをしているので肉は食べません」あるいは「ドムバ中ですので夕飯はいただきません」と言って斎戒を守る。

現地では、近親者の弔いの際(初七日までの間)や子供の学業成就などの特別な祈願があるときに修行されることが多いと聞くが、年中行事として旧暦四月(サガダワつまり仏陀誕生会の月)やツォンカパの誕生月である10月に毎年ドムバをする家庭もいまだに多いと聞く。今回授戒をしてみて分かったが基本的には日本の授戒会の進め具合と共通する部分が多い。ただし補足説明を聞いているとチベット独特の理解もあり興味深かった。

八斎戒の項目は日本のものと大きく変わるところなく、(1)殺 srog gcod pa (2)盗 ma byin par len pa (3)淫 mi tshangs par spyod pa (4)妄語 rdzun du smra ba の四つの根本罪惡及び、(5)飲酒 chang myos par 'gyur ba、(6)歌舞

を楽しむことや華鬘などの装飾品や香水等華美なものを身に着けること glu gar dang rol mo'i sgra dang phreng ba dang spos nyug pa dang rgyan dang kha dog 'chang ba、(7)高く立派な床几 khri stan chen po dang khri stan mthon po で安眠安住すること、そして(8)午後に食事をする事 dus ma yin pa'i kha zas の四つの副次的な罪を離れること、あわせて合計八つの斎戒(=八斎戒)である<sup>(3)</sup>。戒師はこれらの項目に関してひとつひとつその罪深さと煩惱との結びつきを解説しながら、フレーズ毎に復唱させながら誓いをたてさせていく。このあたりの手順は『智度論』巻十三に述べられる「受一日戒法」におおよそ準拠している<sup>(4)</sup>。

戒師の説明では、これらの斎戒目を少なくとも受戒をしたその時点から次の日のその時間まで確実に守らねばならないと言う。当然、他の生命を奪う行為や盗みを日常的に行なっている人はいないのだから、問題は肉食と飲酒とそして午後の断食である。一般の人がこれを守るとは例え一日だけでも容易なことではない。補足説明されたことはこの地方だけの習慣かと思われるが、受戒の後、家に帰ってから摂る朝ごはんはお茶のような軽いものなら許されるが、但し椅子に座って摂ってはだめで地べたに座って摂るというところが興味深い。どうも七番目の斎戒である「不用高床大床 mal stan che mtho」の理解が寢床に関するものとは解されておらずにそのような習慣を生んだのだろう。飲酒の項目でもわざわざ 'bru'i chang dang bcas pa'i chang 「穀類の[醸造]酒を含む酒類」と解説されていた。尚、昼食で避けられる肉食の範疇には乳製品は入っていない。そして非時の食を禁ずるといっても正午以降一切だめという厳密さはなく単に昼食の後にその日の夕飯は食べずに次の朝まで断食するという事を意味している。

断食があけて次の日には普通の生活に戻る。つまり一日一夜の斎戒であって、これが八斎戒の本来の形であるが、日本でも長斎と呼んで数日あるいは数十日続ける信者もいたという<sup>(5)</sup>。現代の青海チベットでも六斎日(つまり8日14日15日23日29日30日の六日)をお斎の日<sup>(6)</sup>と決めて修行する人もいると聞いた。一度中断し再度ドムバの修行を再開しようと思う時は、ラマのところで再び受戒をしなくとも仏菩薩の前で同じ誓いを自誓戒としてたてれば良いことになっている。

当日授戒がどのように進められたかが分かるように手順のあらましを書き出してみたい。戒師をつとめていただいたゲンドゥン・チュータル師は、同地アムド地方のツォンカにある gYi dge'i rta phyug 村出身の高僧チャンキヤ二世ガワン・ロブサン・チューデン Ngag dbang Blo bzang Chos ldan (1642-1714) が著した『授八斎戒儀 *gnyen gnas kyi sdom pa 'bog chog bkod pa'i skabs*』を参照しながら授戒儀を進めておられた。以下にその概要を引用してみたい。

*thog mar dge ba klad kyi don*/(最初に緒善の義)

bsnyen gnas kyi sdom pa 'bog pa'i tshul ni/ len pa po rnams khru byas/ phyag 'tshal te mdun du tsog tsog bur 'dug cing thal mo sbyor du bcug la/ (八斎戒の授戒作法は、先ず受者に対し、身を清めて恭しく師前に於いて礼拝をし合掌をするように促した後)

'khor ba mtha' dag sdug bsngal gyi rang bzhin du 'dug pas 'di las thar ba'i sangs rgyas kyi go 'phang 'thob par bya/(「輪廻を通して苦そのものの中に身を置く我々は、何としても解脱して[輪廻を離れて]覺りの位を得なければならない」 de'i phyir du dkon mchog gsum la skyabs su song ste bsnyen gnas yan lag brgyad pa'i sdom pa blangs la legs par bsrung snyam pa'i sgo nas 'di rjes zlos mdzod/(「その為には三宝に帰依し、八支の斎戒の戒儀を受けて、良くそれを守らなければならない。[そこで、これから唱える文句を]私の後に付いて唱えるべし」)

ces brda' sprad la/(と告知して)

*bar du dge ba gzhung gi don*/(次に本善の義)

btsun pa dgongs su gsol/(「師に申し上げます」)

bdag ming 'di zhes bgyi bas dus 'di nas bzuns ste ji srid 'tsho'i bar du rkang gnyis rnams kyi mchog sangs rgyas la skyabs su mchi'o/(「私こと○○○ ○は、今この時より始め、我が命寿尽きるまでの間、両足尊たる仏陀に帰命いたします。」)

'dod chags dang bral ba rnams kyi mchog chos la skyabs su mchi'o/(「離欲

尊たる法に帰命いたします))

tshogs rnams kyi mchog dge 'dun la skyabs su mchi'o// (「衆中尊たる僧伽に帰命いたします。」)

bdag zla ba byung ngo cog gi nya dang gnam stong tshes brgyad sogs nyin zhas gang yang rung bar bsnyen gnas yan lag brgyad par btsun pas bzung du gsol/ (私は「この満月の日に際して」とか、或いは八日等の「この[六]斎日に際して」とか[日取りについては]どの日でも構わないが、「師よ、我に八支の斎戒をお与えください」)

zhes lan gsum rjes bzlos byed du gzhug cing gsum pa'i tshe/ (と三度後に付いて復唱させて、[=三請させて]その三度目を了えた時に、)

slob dpon gyis bzung du gsol/ (「師よ、どうかお与えください」)

zhes brjod du gzhug/ de nas rang gis (と[あらためて]申し述べさせて、それから戒師みずからが)

thabs yin no// (「慎んでうけるのだぞ」)

zhes brjod cing slob mas (と言いつつ、受者たちに)

legs so// (「心得ました」)

zhes brjod du gzhug/ de nas (と答えさせる。そして)

bsnyen gnas kyi sdom pa de blangs pa tsam gyis mi chog par legs par bsrung dgos pas (「斎戒を受けたならそれで良いという訳ではなくて必ずしっかりと保つことが必要だ。だから」)

sngon gyi 'phags pa dgra bcom pa rnams kyis ji ltar bsrungs pa bzhin du bdag gis kyang legs par bsrung bar bya snyam pa'i sgo nas 'di'i rjes zlos mdzod/ ces brda' sprad de/ (「昔の菩薩や阿羅漢たちが護持してきたと同じようにその様に、我も[この戒儀を必ず]守らねばならないのだとよくよく思念して、以下の文句を[私の]言うとおりに後に従って唱えなさい」と告知して、)

slob dpon dgongs su gsol/ ji ltar 'phags pa dgra bcom pa dag gis srog gcod pa spangs te srog gcod pa las slar log pa de bzhin du bdag ming 'di zhes bgyi bas kyang/ (「師よ、なにとぞ、菩薩や阿羅漢たちが、殺生を離れ不殺生に務めたように、私こと〇〇〇〇によってもまた」)

zla ba byung ngo cog gi nya dang gnam stong dang tshes brgyad sogs nyin  
zhag gang yang rung bar「この満月の日に際して」(とか、或いは毎月八  
日等の「この[六]斎日に際して」とか[日取りについては]どの日でも構わ  
ないが、)

srog gcod pa spangs te srog gcod pa las slar log par bgyi'o// (「殺生を離れ  
不殺生に務めさせたまえ」)

yan lag dang po 'dis bdag 'phags pa dgra bcom pa de dag gis bslab pa la rjes  
su slob bo// (「この第一支分の斎戒によって、それら菩薩や阿羅漢たちと  
同じように学処を随学し」)

rjes su sgrub bo// rjes su bgyid do// (「随得し、随修するなり」)

gzhan yang ji ltar 'phags pa dgra bcom pa de dag gis ma byin par len pa  
dang/ mi tshangs par spyod pa dang rdzun du smra ba dang bru'i chang  
dang bcos pa'i chang/ myos par 'gyur ba/ (「また、菩薩や阿羅漢たちが、  
偷盗や、邪淫や、妄語や、穀類の[醸造]酒を含む飲酒による酔乱から離  
れ」)

bag med pa'i gnas dang/ glu gar dang/ rol mo'i sgra dang/ phreng ba dang/  
spos nyug pa dang/ rgyan dang kha dog 'chang ba dang/ (「自墮落に生活し、  
歌や音楽[に陶酔すること]やアクセサリーや香水や華美な服装[を楽しん  
だり]、」)

khri stan chen po dang/ khri stan mthon po dang/ dus ma yin pa'i kha zas  
spangs te dus ma yin pa'i kha zas las slar log pa de bzhin du/ (「高く広いり  
っぱな椅子やベッドを使っ[て他人を見下すような態度を取っ]たり、する  
ことのない生活をしておられたその通りに、」)

bdag ming 'di zhes bgyi bas kyang zla ba byung ngo cog gi nya dang gnam  
stong dang/ tshes brgyad sogs nyin zhag gang yang rung bar/ (「私こと〇  
〇〇〇によってもまた、この満月の日に際して」(とか、或いは毎月八日  
等の「この[六]斎日に際して」とか[日取りについては]どの日でも構わ  
ないが、)

ma byin par len pa dang/ mi tshangs par spyod pa dang/ rdzun du smra ba  
dang/ 'bru'i chang dang bcos pa'i chang dang myos par 'gyur ba bag med

pa'i gnas dang/偷盗や、邪淫や、妄語や、穀類の[醸造]酒を含む飲酒による酔乱から離れた生活をし、

glu gar dang rol mo'i sgra dang/ phreng ba dang spos nyug pa dang/ rgyan dang kha dog 'chang ba dang/ khri stan mthon po dang/ khri stan chen po dang/ dus ma yin pa'i kha zas spangs te dus ma yin pa'i kha zas las slar log par bgyi'o//歌や音楽[に陶醉すること]やアクセサリーや香水や華美な服装[を楽しんだり]高く広いりっぱな椅子やベッドを使っ[て他人を見下すような態度を取っ]たり、非時[正午以降次の朝までの間]に食事をせずそれを続けさせたまえ)

yan lag brgyad pa 'dis bdag 'phags pa dgra bcom pa de dag gi bslab pa la rjes su slob bo// rjes su sgrub bo// rjes su bgyis do//我は菩薩や阿羅漢たちと同じように学処を随学し、随得し、随修するなり))

zhes rjes zlos byed du bcug la/ rang gis thabs yin no// zhes brjod cing/ slob mas/

legs so//zhes brjod du bcug/と申し述べさせておいて、[それから]戒師みずからが

「慎んでうけるのだぞ」と言いつつ、受者たちに「心得ました」と答えさせる。

*tha mar dge ba mjug gi don/*(最後に後善の義)

de nas bsnyen gnas kyi sdom pa lan re tsam bsrung ba la'ang phan yon dpag tu med pa 'byung bar bsungs pas(そして「斎戒の戒儀をたとえ一度でも護った者にも無量の功德が生ずると説かれるのであるが」)

long byung na zla ba re re bzhin gyi nya stong brgyad gsum dang/('事情が許すなら上弦下弦の両三日[つまり六斎日]毎や、)

gal te long ma byung na nya songs brgyad gsum gang rung ngam de las gzhan pa'i nyin zhag gnyis sam gcig gang rung la bsrung gang thub dang bsrung ba'i tshe/('またもしそれが無理なら月3回毎や、それに拘らずに二日間でも一日でも護ることが出来るならその際に)

mi dge ba las 'dzem gang thub dang('出来る限り不善の行ないを離れ))

dge ba'i phyog sgrub gang thub la 'bad na 'di phy'i'i don thams cad legs par ' grub pas 'bad 'tshal/ (「出来得る限りの善行に努力しなさい。そうしたならこの[戒儀の]後得の義の全てが良く得られるのであるから努力しなさい」) zhes brda' sprad la phyag 'tshal du bcug ste rang gnas su btang bar bya'o// (と告知して、礼拝をさせて、帰宅させるのである。

約三百年前にチャンキャ二世によって著されたこの「授八斎戒儀」は以上のように(dge ba klad 緒善・dge ba gzhung 本善・dge ba mjug 後善)の三支の構成になっている。緒善の中には三帰や発心が簡略に織り込まれ、後善には一日一夜の斎戒を了えて後の日々の善行を薦めている。各々の誓約の文句は三度づつ繰り返されるが、これは白四羯磨(びゃくしかつま)と呼ぶ作法で、この作法を行なうことによって受者の中に戒体が具わるのである。

**キーワード：八斎戒、青海チベット、授戒**

〈注〉

- (1) 長崎法潤氏によれば、五戒にせよ八戒にせよブッダはジャイナ教の禁戒を参考にして構成したのではないかという。ジャイナの体系を作ったマハーヴィーラは在家信者のために七種の禁戒を説いたが、その中の四種の学禁戒(sīlavrata)の二番目に断食精進日(proṣādhopavāsa)を設けた。一ヶ月の内の六日(8,14,15, 23,29,30日＝六斎日)に出家僧の指導のもとで断食精進を行ない、肉や蜂蜜や酒や麻薬や葱を食さず装身具を身に着けないなどを守らせたのである。長崎法潤「佛教とジャイナ教—五戒八斎戒を中心に—」『仏教学セミナー』34, 1981. pp.50-60; さらに遡ってヴェーダ時代の新月祭や満月祭での夜の断食つまり日没から日の出までの祭式行為としての断食 upavasatha の習慣が在家仏教徒の六斎日での夜の断食儀礼に残ったと考える研究者もいる。阪本(後藤)純子「日本印度学佛教学会2017年度花園大学に於ける学術大会での発表要旨」; 仏教文献の中でこれら在家信者が六斎日に修行する斎戒に触れる記事は多いが、その中、最初期に属するものとして「スッタニパータ」の次の記述がある。「生物を害すべからず、与えられざるを取るべからず、また飲酒者たるべからず、淫事たる不梵行をば離れるべし、夜に非時食を食すべからず、花環を著くべか

らず、芳香を用うべからず、地上に敷きたる床にのみ臥すべし。これ即ち八支の布薩(atthāṅgikam uposatham)なるものにして、苦辺を尽くしたまいし佛によって説かれたり。而して半月の第十四日、第十五日、及び第八日に布薩を行なうべし。」(Suttanipāṭa 400-402)。

- (2) アングッタラ・ニカーヤ<増支部>8.21: 村上勉「原始仏教に見られる在家者の実践」『佛教大学大学院紀要・文学研究科篇』第46号掲載予定。
- (3) 不殺生、不偷盗、不淫、不妄語、不飲酒、不聽歌舞、不坐広床戒および非時食戒の八とする場合もある。この中、非時食戒をとくに斎戒と呼び八斎戒の中心であると捉える場合が日本では多い。蓑輪顕量「日本古代における八斎戒の受容」『印度学仏教学研究』48-1, 1999.
- (4) 八斎戒の受戒作法は『大智度論』第十三巻に述べられる「受一日戒法」を起源とする。これを承けて多くの受八斎戒儀の文献が作られたようで敦煌文書の中に唐時代に作られた多くの戒儀書が残されている。土橋秀高『戒律の研究』1980; 里道德雄「敦煌文献にみられる八関斎関係文書について」『東洋大学大学院紀要』19, 1982, pp.77-96.; 中国での八斎戒の受戒作法の変遷について考察した阿純章(おかすみあき)「受八斎戒儀の変遷について」『天台学報』47, 2004.によれば、受戒作法の手順は三帰依→懺悔→説戒相→發願(『大智度論』「受一日戒法」)の四門から敦煌スタイン本等に見られる讃戒功德→啓請聖賢→懺悔罪障→帰依三法→受八戒→回向發願という六門へ、そして讃戒功德→啓請聖賢→懺悔罪障→帰依三法→受八戒→説戒→回向發願という七門へと変遷していったようだ。
- (5) 蓑輪顕量「日本における長斎の受容」『印度学仏教学研究』47-2, 603-610, 1998.
- (6) 法然上人の『和語燈録』中の『百四十五箇条問答』において、法然上人に対して当時の庶民が仏教信仰に関する様々な素朴な質問を投げかけているが、それらの質問の多くはお斎の時の生活に関するものである。例えば「精進は受戒後いつまで行なったら良いのか」「六斎日に葦や蒜は食べないほうが良いのか」などである。信者たちの感心はもっぱら斎戒に関することがらに重点が置かれている。伊藤唯真「法然浄土教と民俗信仰—『百四十五箇条問答』を中心として—」『法然浄土教の総合的研究』山喜房仏書林 1984.